汝も又國をや思ふますらをの
駒そいさめる戰のさま　松本文子

霞たつ野原にむるゝ若駒の
別れ〳〵にならんとすらん　池谷淺子

月おぼろあたりしつけき春の夜に
老馬をなてゝゑむ翁かな　小笠原政治

のりましゝ主かはふりの朝まだき
うまやの中に馬ぞいなゝく　稲垣安子

れそくとも心の駒したゆますは
文の山道いつかこゆらむ　佐々木雪子

幼なとち木馬にのりて遊ふかな
みとり涼しき庭の芝原

雑詠三首

聞郭公　いく子

おもひねの夢かあらぬか郭公
たゝ一こゑをありあけの空

名所河

こと〻ひしむかしを語れその世より
すみたの川のみやことりはも

曉水鷄

ひとをまつ心ならひにたゝく戸を
あけてくひなのあかつきの聲

雑詠三首

鶯　水

友の結婚を祝ひて

色かへぬ千世のはしめの若緑
ふかき契りや相生の松

春を惜みて

梓弓はるのゆくへをたつねてぞ
ひくまの野邊にかりくらしける

故郷なる友に

あひ見んと思ふ心のせつなさに
今霄も君をゆめに見しかな

春の歌三首

敏子

曙

つく〳〵と思ひ暮してはれやらぬ
心ににたる春のわけはの

霞

限りなくかすみにけりな懐しき
都のそらやいつこなるらむ

鳥

花になく小鳥の聲も匂ふなり
都の春もかくやのとけき

蝶

東くめ子

春の御神の　みつかひと

世の歌人に
胡蝶の身こそ
夜はすみれの
朝はひばりの
春のこてふの

白き蝶

散りかふ花と
ともにしまへば
花に似たりと

黄なる蝶

枝もたわゝに
山吹のへに
いづれを花と

黒き蝶

げに花よりも

めでらるゝ、
樂しけれ
床にねて
歌をきく
おもしろや

うちみだれ
わかすがた
人はいふ

咲きをゝる
やすらへは
人はとふ

うるはしき